

ちゃぶ台次世代コーホート（第 7 回研修会）開催要項
同 Advanced Course（第 10 回研修会）開催要項

- 1 趣 旨 教職志望学生と現職教職員等が、教職員としての資質能力の向上、教職実践課題の解決力や省察力等の醸成を図ることを目指した協働型教職研修を行う。
本年度最終回であり、研修プログラムの振り返りを行うとともに、これからの教員、特にステージ1・2期にある教員の在り方についての対話や講演をとおして、教職キャリアの形成や充実深化を図る。
- 2 主 催 山口大学教育学部・大学院教育学研究科（教職大学院）
独立行政法人教職員支援機構、同 山口大学センター
- 3 共 催 山口県教育委員会、山口市教育委員会
- 4 開催日時 令和8年3月14日（土） 13:00～17:00
- 5 開催場所 山口大学教育学部「21 番教室」（教育学部講義棟 2 階）
〒753-0831 山口市大字吉田 1677-1
- 6 参加者 教職志望学生、教職大学院生、現職教員、教育委員会等関係者、大学教職員等
- 7 研修内容
 - (1)開会行事 (13:00～13:10)
あいさつ 山口大学教育学部 学部長 中 田 充
 - (2)ちゃぶ台対話 (13:10～14:40)
内 容 「1 年間を振り返って ～1 年の歩みと新たな問い～」
支援者 山口大学センター・教育学部・教育学研究科教職員等
 - (3)総括講演 (14:50～16:50)
テーマ 「若手教員に期待すること」
講 師 萩市教育委員会 教育長 池 田 廣 司 さん
 - (4)まとめ・閉会行事 (16:50～17:00)
講 評 山口県教育庁教職員課 主査 大 津 久 美
あいさつ 教職員支援機構山口大学センター センター長 和 泉 研 二
8. 「感染症法（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）」にもとづく取扱（お願い）
 - (1)本研修では、主催者として「感染防止の 5 つの基本（厚生労働省 ADB,2023.3.8）」を参考として感染予防に努めるとともに、受講者一人一人に感染防止に向けた責任ある行動を要請する。
 - (2)研修地域や受講者居住地の感染状況や推移、研修関係者の意向等をふまえて、研修形態を「対面・参集型研修」から「(完全) オンライン研修」等に変更する場合がある。
9. その他
 - (1)本研修事業は、独立行政法人教職員支援機構地域センター（山口大学センター）事業経費および山口大学教育学部「ちゃぶ台プログラム」事業支援経費等により運営される。



NITS・山口大学教職大学院・山口県教育委員会・山口県PTA 連合会・山口県弁護士会コラボ研修 PG (Nits-Cafe) 学級通信「学校と自身のリアルに気づき、変化を生み出すワークショップ」2026.1 NITS 山口大学センター・山口大学教職大学院



いつもの場所、いつもの空気感とは違う非日常感が「学びのスイッチ」を入れてくれた！ 今年度の「Nits-Cafe」も「豊かな学びと心地よい寛ぎの場・空間」としてありました！

2025年12月27日の9:00、「Nits-Cafe in YAMAGUCHI」の開店です！

「本日もご来店ありがとうございます。朝から美味しい珈琲、入（淹）れております...どうぞごゆっくり...！」

山口市「セントコア山口」を会場に、ある時は心地よいBGMの中でお茶しているように... ある時はまるで山口大学「ちゃぶ台ルーム」に居るかのよう... 教育や教職を語り、一緒に考え、成長しあえる学びと変容、成長の「場・空間」が今日のCafe。とっても素敵な一日の概要を報告します。

カフェ・講義演習 教育現場にも法の支配を 学校のリアル = 日常から考える

午前の「Cafe」は、学校や教職員の「リアル=日常」を学校法務の視点から見つめ、自身の教育指導と関係法令を結びつけるケーススタディー、山口県弁護士会からお越しいただいた講師の「いたむら法律事務所 藤村亮平弁護士」さんの講義演習と「気づき」交流を行いました。

「Cafe」には、山口・広島先生方26人、教職志望の学生さん19人、山口県教委の浅賀先生、大学の教職員16人と講師(弁護士)の藤村亮平先生の63人さまのご来店がありました。

「学校法務」というちょっとお堅いテーマなので...と思っておりましたが、藤村弁護士さんの軽快な語り口と質の高い専門的ご講義、やる気満々の皆さんのお陰もあって充実した学びと気づきの場となりました。



参加者のコメントから

・ ケース検討の際、私の視点は「保護者からどの段階でクレームが出るか」に偏っていた。学校への問い合わせをすべてクレームと捉え、保護者への説明も「クレームを避けること」が第一目的になっていた。実際に担任として保護者対応をしている場面では、そこまでクレームを恐れているわけではない。しかし、事例を考える段階になると、なぜか保護者を「敵対的な存在」として設定してしまう自分がいる。

藤村弁護士のお話しにもあったように、子どもに接し責任を負う立場にあるのは教員だけではなく保護者も同じである。本来、保護者との情報共有は、教員同士が情報を共有することと同じ性質を持つはずである。にもかかわらず、私は無意識のうちに保護者を「クレームの発信源」として捉え、協働の相手として見られていなかったことに気づかされた。保護者との関係を恐れではなく、信頼と共有に基づいて築くことが子どもの最善につながるという原点を改めて確認した。

また、教員の職務において法律が関わる場面というと、不祥事や訴訟といった否定的なイメージが先行し、どうしても「縛られる」「見張られる」という感覚を抱きがちである。しかし、制度が策定された背景を理解し、自身の行動に責任をもって判断していれば、法律はむしろ自分を「守る」ものにもなるということを改めて実感した。(小学校)

・ 新たな気づきは「教員と弁護士では物事を見る視点が大きく異なる」こと。事案が起きた時、教員は児童のその後という「未来」を基準に考えがちである一方、弁護士は「なかったことにはできない」過去の事実をもとに判断するという視点を教わった。これまで、子どものために良かれと思って行ってきた教育的配慮が、本当に適切であったのかを改めて考えさせられた。「社会で許されないことは、学校でも許されない」という言葉は当たり前のように、日々の指導の中で常に意識し続けることの難しさを感じた。学校は、児童が失敗を経験しながら学ぶ場である一方で、決して許されない失敗があることも、同時に教えていかなければならないと考えた。



また、「法律に敏感になる」という言葉も印象的だった。「教職員である前に、一人の大人でなければならない」という言葉からは、「法律を守って生活しているからこそ、法律に守られる」という基本的な姿勢を、改めて自覚させられた。視点が異なるからこそ見えてくるものがある。だからこそ、チーム学校の一員として、学校と弁護士との間の心理的な壁が、今後さらに低くなっていくことを期待したいと感じた午前中の学びであった。（小学校）



・ 教育現場と法の関係性について考えることが出来た。特に、児童生徒からの暴力・暴言の観点は自分ごとのように感じた。特別支援学校での実習中、予定変更で情緒が不安定になってしまった生徒がバットを持って教室へ帰ってきたことがあった。制止のため、教員3名が生徒の近くに行くのだが、髪の毛を引っ張られる、手足で強く叩かれる、暴れた足が教師の顎に当たるなど、児童生徒からの暴力ととれる行動を実際に目にした。学校の対応としては、落ち着くための教室を設けること、予定の伝え方を変えてみることで、暴力をするとどうなるのか伝えることなどが話し合われていた。今回の講義でこの件を思い出しながら、教育現場と法の支配の関係性について考えた。私としては、特に特別支援に関わる



現場では、法の支配のバランスがとても難しいのかなと思った。確かに暴力はあってはならないものであり、生徒たちが社会へ出たら法の支配は必ず存在する。しかし、彼らは気持ちが言葉にできず不適切な行動で示してしまうことがあり、学校はそんな彼らに適切な行動をトライ&エラーで教えていく場所だと思う。そのため、暴力が起きてしまうことを良しとしてはならないが、学校でできる教育的措置と法的対応の判断がとても難しいものだなと感じた。ただ、法は教員である自分自身を守ってくれる大きな盾であることを教えて

いただいたので、「子どものしたことだから仕方ない」「障害があるから仕方ない」という考えではなく、子どもも1人の人間として関わり、然るべき対応ができる教員でありたいと改めて思った。（学生）

・ いじめやハラスメント、学校事故等の具体事例を基に、法の視点から学校現場を捉え直す学びがあった。法は特別なものではなく、社会の常識を明文化し、教職員と子ども双方を守る「護身術」であるという捉え方が印象に残った。特に、初動対応や記録化、組織的対応の重要性は、個人対応に陥りがちな現場にとって大きな示唆であった。事実認定と法的義務を切り分けて考える思考枠組みは、冷静な判断力の必要性を再認識させるものであった。教職員である前に一人の大人として、社会や法に敏感である姿勢の重要性を学んだ。（高等学校）

・ 弁護士のお話を直接聞く機会は初めてで、同じ事例でも教員とは見方が違うことがわかり、新たな視点を獲得した。特に印象に残っているのは、裁判所の判断の流れである。「前提事実→法的義務→事実認定→法的評価」という流れは、学校における危機管理事案に対する流れと同様であると思った。（中学校）



ワークショップ 保護者と一緒に描く先生像 学校のリアル = 見方、見え方、考え方から考える

午後の「Cafe」は、学校、教職員や保護者の「リアル=見方、見え方、考え方」をもとに、参加者と保護者が理想の若手・中堅教員像を一緒に描く対話型ワークショップを行いました。

こちらの「Cafe」には、山口・広島・大阪の先生22人、教職志望の学生17人、山口県教委の大津先生、大学の教職員15人と助言者としてお招きした山口県PTA連合会の10人の皆さん（保護者）、計66人のご来店がありました。恒例になりつつある保護者の方々を囲んでのワークショップ。今回も「元気ハツラツ!学校も先生も大好き!」なお父さん、お母さんたちのお陰で、和やかで華やかなワークショップとなりました。

ご来場いただいた皆さんを1班から紹介します。「松田龍信さん、溝口憲治さん、島田一道さん、齋藤明雄さん、小田村匠さん、安堂卓也さん、廣兼愛子さん、辻本千夏さん、角川早苗さん、佐伯弘明さん。」本当にご多用にもかかわらず、駆けつけて頂きありがとうございました。





参加者のコメントから

- ・ 午後のCaféでは山口県PTA連合会の方を交え、2～5年目教員に求められる資質や理想像について議論した。一人一人の発言をつなぎながら議論を深める役割は難しく、ファシリテーション力の必要性を痛感した。自分が約20年の経験をもつ現職者として、若手の成長をどう支え、専門性と人間的魅力の両立をどのように促すかは、今後の課題と捉えている。

また、PTAの立場からの率直な意見に触れ、保護者の視点や地域との信頼関係を理解することの重要性を再認識した。現在、自身もPTA活動に携わっていることから、学校経営における多様なステークホルダーとの対話の必要性を強く感じた。今回の対話は専門職としての視野を広げる貴重な機会となった。(中学校)



- ・ これまでの教員経験で積極的に保護者と関わってきましたが、保護者の方のお話はとても新鮮で、私たちの働き方に新たな示唆をいただいたと思います。ご自身はPTAをなくす方向で以前は動いていらっしやったこともあり、現在は従来の形式にとらわれないPTA活動を進めておられます。保護者の価値観にも大きな変容が生まれており、今がその過渡期だとも仰っていました。

教員の中には、保護者・地域と距離をとろうとする人が一定数いると思っています。そして、その意識には若手の頃に受けた周囲の先生からの指導が一つの影響を与えていると考えます。今回実施したような研修を校内研修で実施するとよいのかもしれませんが、PTAの方々をお招きし、どんな先生が求められるかを共有できると先生方の意識も変わるのかもしれませんが。(中学校)

- ・ 若手から中堅の理想の教員像について、校種や立場によって違いはあったが、共通する部分もあり、面白い話し合いであった。PTAの方からは、教員の立場ではわからなかった考えを聞くことができ、多角的な考えを知るとはとても大切だと思った。特に印象に残っているのは「地域連携は教員も当事者意識をもってほしい」という話であった。地域連携に関して、教員はどこか第三者のような立場で話をされることがあるということで、教員もその地域で暮らす者の一員として参画することで地域からの信頼も得られるのだと知った。(特別支援学校)



- ・ これまで、保護者も交えて子どものことを話し合う機会があったが「若手から中堅の先生像」について語り合う経験はなく、どのような対話になるのか楽しみにしていた。実際に話し合ってみると、年代や教職経験によって使われるキーワードや価値観には違いがあるものの、理想とする教員像そのものは驚くほど似ていることが分かった。だからこそ、年代や教職経験、置かれている立場の異なる人が集まり、対話するワークショップの意義を改めて実感した。若い世代が大切にしている考えに触れることは新鮮であり、学ぶことの楽しさを再認識する機会ともなった。また、保護者としての立場も意識しながら、保護者が教職員をどのように見ているのかについて率直に語り合えたことも、大きな収穫であった。グループで話し合い、最終的に導き出した理想の教員像は、(自分から×魅力のある×高い専門性) = good とかいて「カッコいい大人」である。立場や年代を超えて納得感をもって共有できる教員像が描けたことに、充実感のある午後の学びとなった。(小学校)



- ・ 2つのキーワードが印象的だった。1つは「それなり」の罠にかからないということ。初任から数年経つと学校の流れややるべきことがわかってきて、それなりに出来るようになるかもしれない。しかし、それなりの授業、それなりの支援ができて、そこで自身を見つめ直さなければ「それなり」の教員になってしまう。私が今、考える理想の教職員像のひとつである「素直さと謙虚さ、やる気を持って色んなことに挑戦できる人」は変わらずに持ち続けたいと思う。

もう1つは「全部で100%」である。これは、教員の心の余裕につながるのではないかと思った。何でも全力で取り組むことは、その分出来なかったことに目を向けてしまうことになる。私は、教員になったら全力で取り組むことは大事にしながら、出来たことややりきった自分をしっかり褒めて心の余裕に繋がれたらと思う。(学生)

- ・ 午後のCaféでは、PTA関係者、元校長、大学関係者、教員など多様な立場の参加者が一堂に会し、「理想の教員像」について率直な対話を重ねた。経験や価値観の異なる他者の言葉に触れることで、自身が無意識に前提としてきた教員像が揺さぶられ、視野が大きく広がった。

言葉の引っ掛かりを起点に深掘りする対話は、理想論を具体像へと昇華させる力をもっていた。中でも「辛口の隣人」というキーワードは、中堅教員として慣れや自己満足に陥らず、自らを鍛え続ける覚悟の必要性を強く意識させるものであった。他者との対話を通して、自身の在り方を問い直す、極めて示唆に富む時間であった。（高等学校）

・ 理想の教師についてグループで話し合うとき、経験年数や立場で内容が違うと感じました。学生は教師の具体的な行動をイメージしていて、これから自分が教師になるときにどう振る舞いたいかを考えている、中堅になると「信頼される」「子どもが登校したくなる学校」など、抽象的な人物像や学校像をイメージしていたように思います。

具体的な行動の話からは、「自分はそれができているか」ということを頭の中で描いてみたり、抽象的な話からは「そのために自分だったらどうするか」を考えたりしました。ある先生が「去年もやったけど…」とお話しされたように、1年に1回くらい、自分の理想の教師像を考えて自己チェックをするのも大事だと思いました。一人ひとりの意見を聞くたびにいろいろなことを考えさせられて、とても頭を使う、賢くなりそうな研修でした。

グループワークをまとめる際、さらに better なことを考えるとしたら、理想の教師像をまとめるときに、それぞれが挙げた意見を具体と抽象に整理したり、それぞれの意見に対してみんなで再度片付けたりしながら共通理解を深めながらまとめられたらよかったかなと思います。時間は2時間以上ありましたが、その中でよりよいグループトークの進め方を考えていきたいとも感じました。

各グループの発表では、みんな話がうまくて、さすが教師、教師を目指す人だと感心させられました。いつもコーホートの熱量に元気をもらって、再び学校現場に向き合っています。（小学校）



Nits-Cafeって 肯定的・支持的・連帯的で、温かく華やかな「集い、交わり、学びあう場」

参加してくださった皆さんにとって、どんな場・空間だったのでしょうか。素敵な Cafe になっていたら光栄です。振り返りコメントでは「少し人数が多かった」、「いつものちゃぶ台より遠かった」もありました。反省材料です。コメントを材料に、AI 搭載のリサーチ・情報整理支援ツール (NotebookLM) に描いて貰いました。



参加者のコメントから

・ コーヒーを片手に円卓で語り合う形式は、心理的安全性を高め、率直な意見交換を促進する効果が高いと実感した。研修というよりも「対話の場」として設計されていたことで、参加者同士の関係性構築にも寄与したとを感じる。対話内容を可視化するツール（付箋、ミニホワイトボード、デジタルボード等）を組み合わせることで、議論の焦点を整理し、得られた知見を組織に還元しやすくなると思う。

また、話題に応じて立場を入れ替えるローテーション形式や、事例提供者に対して参加者全員が質問を投げる「インタビュー型対話」など、より多様な参加スタイルを取り入れることも有効である。心理的負担を軽減しながら、学びと相互理解を深める研修デザインを今後も探っていきたい。（中学校）

・ Cafe形式の研修は、参加者一人ひとりが安心して意見を述べ、互いの考えに耳を傾けながら学びを深めていくうえで、有効な研修方法の一つであると感じた。講義型の研修では得にくい、価値観の共有や内省の深まりが自然に生まれ、教職員自身が「考える主体」として研修に関わることができる点に、魅力があると思う。また、立場や教職経験の異なる参加者が同じテーマについて語り合うことで、自身の考えを見つめ直し、視野を広げる機会となる点も、Cafe形式ならではのよさである。こうした対話の積み重ねは、チーム学校としての共通理解を少しずつ育てていくうえで、大切なプロセスではないだろうか。これまで学校での研修では取り入れたことがなかったが、今後は校内研修の在り方の一つとして提案していきたいと考えている。（小学校）

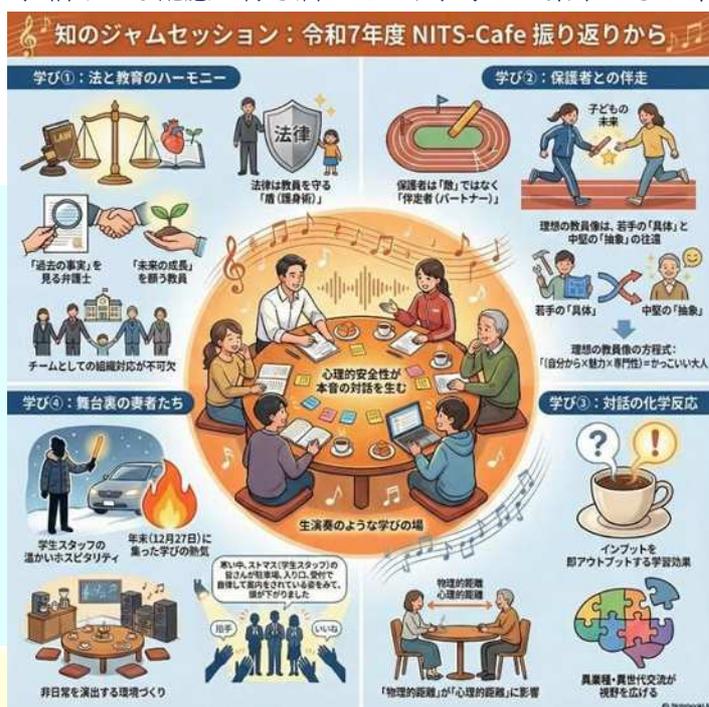


・ ちゃぶ台ではいつも大学の教室を使い、教室内の机をくっつけた上でグループワークを行っているため、メンバーの距離が近く、話しやすくなっていると思う。しかしながら、今回は机が丸机で大きさもかなりのサイズであったため、メンバーの距離が離れていたため、自分としてはいつもよりも話しにくいと思えてしまった。ちゃぶ台は、グループワークが多く、話し合いが重要となる研修だと考えているため、グループメンバーの距離は近い方が良いと考えた。（学生）

・ ちゃぶ台研修は、研修内容そのものだけでなく、大学以外の会場で研修を運営する際の工夫や思いについても学ぶことができる貴重な機会であった。スタッフとして関わっても、参加者として参加しても、多くの気づきを得られる点がこの研修の大きな魅力であると感じた。

当日は、朝早くから寒一中、ストマス院生の皆さんが駐車場案内や受付業務を担当しておられた。院生の声掛けや表情が、研修を重ねるごとに変化し、成長していることが感じられた。会場には時計の設置、コーヒーの準備、文具や模造紙の配置など、細やかな配慮が行き届いており、学びに集中できる環境が整えられていた。また、担当の先生方は、参加者やスタッフ一人一人に合わせた言葉掛けをされたり、一緒に準備をされたりしながら迎えておられ、この研修にリピーターが多い理由の一つであると感じた。（小学校）

・ 学生、現職教員等といった立場の異なる参加者が、一つのテーマについて同じ円卓を囲み語り合える場は、大変ありがたく心に残る時間であった。学生の熱意や希望に満ちた言葉に触れる中で、自身の実践や教員としての在り方を静かに省みる機会となった。Cafe形式によるフラットな対話は、教職員研修において欠かせない要素であり、その意義が本会において自然に体现されていたと感じる。対話を通して学び合うこの場の価値を改めて実感するとともに、学校現場における研修の在り方を考える上でも、大きな示唆を得ることができた。（高等学校）



多数のご参加、ありがとうございました。

「学び続ける教師」、「自律的な学び手」など、皆さんそれぞれが自身の目指す姿を描いて、更なる高みを目指して歩いて行く、そんな1年にしましょう！「ちゃぶ台」はいつも皆さんとともにあります！そばにいます！